

その問いかけに言葉以上の意味がなかったのは最初だけだった。

「くちびる、乾燥するの？」

「え？」

「いや、今日、リップクリームよく塗ってるから」

男女は昼から夜まで時間を共に過ごしていた。以前から話していた蕎麦屋に行き、アクセサリーショップと文房具屋を楽しみ、見つけてしまった時計店に入り、古書店で思わぬ買い物をし、ほどよい喧騒のイタリアンレストランで夕食を済ませ、そして今、男は女を家に送っていた。女は控えめにそれを断ったが、男は女の本心を見透かしていた。男は女をよく見ていた。意識は特にしていなかった。ただ、見てしまっていた。そんな彼にとって彼女が唇を妙に気にしていることを知るのは簡単で自然なことだった。

しかしふたりはまだ恋仲ではなかった。そして互いに、動くとした変わるとしたら終わるとしたら伝えるとしたら伝えられるとしたら、それはもう今日だろうと理由なく予感していた。ふたりで出かけるのは今回が初めてではなく、もう何度も出かけていた。ただの友人としては八回、そうではないあやふやな関係になってからはもう十三回。計二十一回。今回が二十二回目だった。

二十二回目のそれをそう捉えていたのは、強いて言うならば感情が臨界を迎えていたからだ。相手を深く思うか、感心を失くしていくかという岐路にあった。互いにあった。共有はしていなかった。今日、うまくいかなければ連絡を完全に絶とう、という決意も互いにあった。

女は賢く、より必死だった。

「……そうだけど、それ以外にも理由あるよ」

この返答によって最初の質問は言葉以上の意味を後付けされた。

「……理由って、なに？」

単なる問答ではなく、駆け引きになった。場所は夜桜が綺麗な穴場の公園のベンチ。人影はない。鯖柄猫と白猫がふたりを見ている。ふたりは気付かない。猫の眼差しにはころなしが見守るような色があった。

「私、キスしたことないんだ。これから何度するのかわからないけど、最初くらいは万全の状態でしたいと思ってるんだ」

明確な、わかりやすい返答ではない。しかし、それを意味するのが何か察せない程、想像力の無い男ではなかった。あれこれと考え悩んでしまう性格はこれまでに彼と彼女の関係性を複雑なものや濁ったものにしてきたが、今回に限っては良いほうへ作用した。つまりどういうことなのか、と訊くのは野暮だと男は断じた。男は平静を装いながらも内心は天変地異さながらだった。

「じゃあ、してみる……？」

女は目を閉じ、顔を上げた。男はこの世で最も柔らかいものが何なのかを知る機会を得た。